

教育センター通信

第5号(通算121号)

令和6年9月30日

三条市教育委員会

教育センター発行

ほ ど 火床の火の心を紡ぐ

小中一貫教育

トップページ



わくわく科学フェスティバル

8月8日(木) 体育文化会館

子どもたちの学びの形から考えること

学校教育課 指導主事 外山 良史

芸術、スポーツ、学びの秋です。各学校では文化祭、合唱コンクール等、教育課程の中核を担う行事に向けた準備が本格化していることと思います。行事に向けた活動を通して子どもたちの力を高めるために様々な手立てを考え、実践してくださっていることに感謝申し上げます。学校行事での異学年との関係がもたらす学校での大切な学びには次のようなものがあります。

一つは、子どもたちが行事に向け主体的に活動する中で、教師の教えや促しがなくとも、先輩たちの姿から学んだ言動が多く見られ、教師が思い切りほめる場面があると思います。これは、専門的な集団に徐々に参加し、経験を積むことで中心的な役割を担うようになる過程を説明した「正統的周辺参加」に当てはまり、学校にある大切な学びの形と考えます。様々な理由、特に感染禍の影響で、行事へのアプローチがこの3年間大きく変化しました。この間、子どもたちが学んできたことを考えると、3年前にシフトを戻していくことは、初めて経験することと同じ感覚になる子どもも多いのではないのでしょうか。

もう一つは、子どもが少し難しいけれどできそうだなと思ってチャレンジする姿がよく見られることです。自力でできるようになる子どもだけでなく、上手くできずに困ってしまう子どもも出てきます。よく見ていると、上級生が絶妙なタイミングでアドバイスを与え、「できた!」という場面があると思います。子どもが今できることと、助けを借りればできることの間には差があり、今は一人ではできないけれど、助けを借りればできる領域があるという「発達の最近接領域」の考えです。今はできなくても、次には一人でできるようになる可能性のある領域があることに着目して教育活動を展開していくことは、重要だと考えます。

この二つは学校行事、異学年交流に限らず、小中一貫教育における学びの形の一つです。学校行事がこの大切な学びの形を意識した意図的な支援、指導となっているか。そのような視点からも活動を振り返り、次の一手を考えてみてはどうでしょうか。

学園紹介

三条学園 (スポーツ交流会・学園メディアコントロール週間)

裏館小・上林小では、6年生が運動しながら関わることを目的に、「スポーツ交流会」を行いました。ジェスチャーだけで自分の誕生日を相手に伝えて順番に並ぶなどのゲームを楽しんだり、アルビレックスランニングクラブのコーチの指導を受けて走り方の基礎をつくる運動をしたりしました。

また、学園メディアコントロール週間では、「めざせ！メディアコントロールの達人」と称した冊子を配付し、中学生にはタブレットでいつでも見ることができるようにしました。メディア接触をコントロールする力を付けるために、帰宅してからの過ごし方やメディアを利用して良い時間、利用する場所など、家庭でルール作りをしました。



スポーツ交流会 7月9日 栄体育館



メディアコントロールの冊子

瑞穂学園 (小中連携挨拶運動)

瑞穂学園では、年に2回、本成寺中学校の生徒が月岡小学校、西鱒田小学校に出向き、朝の挨拶で心の交流を進める「小中連携挨拶運動」を実施しています。

9月12日(木)には、西鱒田小学校で、13日(金)には月岡小学校で、心温まる朝の時間が流れました。中学生からは「小学生が大きな声で挨拶を返してくれて嬉しかった」「(小学生が)大きくなっていることに驚いた」との声が聞かれました。小学生との交流を心から楽しんでいる様子が伺えました。今後も学園の活動の柱として取り組んでいく予定です。



「おはようございます！」と元気に挨拶をする
西鱒田小児童と本成寺中学生徒



久しぶりの再会にハグ&身長比べをする
月岡小児童と本成寺中学生徒

中国鄂州市との交流協定

8月7日（水）に、中国湖北省鄂州市との友好都市提携30周年を記念し、三条市長を始めとする訪問団が現地を訪問し、鄂州市教育局と三条市教育委員会における中学校間の交流活動の推進を目的に中学校交流提携協定を締結しました。昨年8月、鄂州市行政代表団が三条嵐南学園を視察し、協定締結に関する覚書を交わしました。その後、協議を重ね、この度の協定締結に至りました。

当日は、鄂州市内の武昌学校を訪問し、学生が切り絵、合唱、武術等の活動をする様子を視察しました。



切り絵



合唱



武術

国語科授業研修

令和6年8月5日（月）開催

新潟大学附属長岡小学校の長谷川仁様と新潟大学附属長岡中学校の伊藤裕様を講師にお招きし、「聞くこと・話すこと」に焦点付けた授業づくりについて研修しました。

長谷川様からは、「どうすれば対話が始まるのか」、まず保障すべきは承認の実感であり、量から質は生まれ、ペア活動でひたすら鍛えろとの御指導をいただきました。伊藤様からは、中学校のスタート期に「聞くこと・話すこと」で大切な点は、「違い」を知り認めること、集団で「経験・体験」を共有する、「教育活動全般」で何度も経験させることとの御指導をいただきました。

「聞くこと・話すこと」について、講師のお二人に共通するキーワードは「心理的安全性」でした。「聞くこと・話すこと」の土台には、良好な人間関係と支持的風土のある学級づくりが大切であることを学びました。



研修の様子

参会者の感想（一部抜粋）

- 子どもたちが読みを深め、話したくなる授業を展開するためには、「話しても大丈夫なんだ」という環境や関係づくりが大切だと改めて思いました。また、話す経験を積み重ね、問い方を変えていくことが有効だと分かりました。
- 小学校から中学校への学習に移行していくとき、シームレスな授業づくりをすることについて、自分がこれまでもっていなかった視点であったため、新たな気付きとなりました。

不思議発見！わくわく科学フェスティバル

8月8日(木)開催

わくわく科学フェスティバルは、理科好きな子どもを育てることを大きな目標にした一大イベントです。三条市科学教育推進事業実行委員会が主催する四つの事業（わくわく科学フェスティバル、科学・模型工作教室、子どもの科学教室、科学ゼミナール）の一つです。

体育文化会館での開催は3回目となりました。猛暑の中、幼児、児童生徒、保護者約650人が来場し、出展関係者や支援者を含めると800人を超えました。

ブースの出展には、市内近隣の大学や高専、高等学校、中等教育学校、NPO法人や企業など15団体の協力を得ました。第一中学校科学部の生徒もブース出展者として参加し、フェスティバルを盛り上げていました。また、新潟大学や新潟県立工業高校の学生、市内教職員からは、ブースの運営や児童生徒の安全管理に協力していただきました。



【コンクリートでのオリジナルキーホルダー作り】

子どもたちにとって魅力あふれるブースばかりでした。子どもたちの笑顔はもちろんですが、指導者・支援者の熱意あふれるフェスティバルでもありました。科学が好きな子どもたちがたくさんいることも実感できました。

アンケートでは、ほとんどが肯定的な評価でした。「いろいろなことがあってびっくりしたけど、やってみたら全部楽しかったです。また来年も来たいです。」「こんなにも面白い科学があって楽しかったです。」「去年参加して子どもがとても喜んでいたので、今年も参加しました。作りやすく楽しめる内容でとても助かりました。ありがとうございました。」など、楽しかった思いや感謝の気持ち、来年も開催してほしいという感想が多くありました。

たくさん子どもたちが待ち望んでいる素晴らしい事業です。改善点もありましたので、次年度に向けて検討し、子どもたちにとって更に魅力ある科学フェスティバルになるようにしたいと思います。



【地震に強い建物をつくろ！】

「これはどうやればいいの?」「うまくできたよ!」と、子どもたちとブース担当者の楽しいやりとりがどのブースでも見られました。出典ブースは「投げたら戻ってくるブーメランを作ろう」「ペットボトルと金属ばねを使ってオリジナルのメガホンをつくってみよう」「不思議な液体、ダイラタンシーを体験しよう」「本物そっくり!化石のレプリカをつくろう」など、



【楽しい! 光るスライム作り】